

1年組、2年組、3年組 道徳学習指導案

日時 平成28年10月7日(金) 4校時

場所 武道場

生徒 1年男子14名・女子11名

2年男子12名・女子14名

3年男子17名・女子15名

計83名

指導者

1. 主題名 友達への信頼 内容項目 2-(3) 信頼・友情

2. 資料名 「いつも一緒に」 【出典：正進社『キラリ★道徳』】

3. ねらい

心から信頼できる友達を持つことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする態度を育てる。

4. 主題設定の理由

中学生の時期は、互いに心を許しあえる友達を求めるようになる。また、親や教師に多くのことをゆだねてきた児童期から脱し、独立しようとする発達の段階にある。それゆえに世代の違いによる考え方や価値観の違いを強く意識するようになり、同世代に良き理解者を求める気持ちが高まってくる。一方で、友達との距離のとり方がうまくいかず、悩んだり傷ついたりしやすい時期でもある。そのため、時には、相手に都合良く合わせたり、最初から一定の距離をとった関係しか持たない人も出てきたりする。

そこで、改めて「友情」について考えることで、自分に都合の良い相手とだけの狭い人間関係に留まることなく、内面的な良さに目を向け、互いに認め合い高め合える信頼関係を築く姿勢を育んでいきたい。

5. 指導にあたって

(1) 資料について

主人公の真理子は、仲良しだったみゆきがバレーボール部のレギュラーになったときから、以前のように素直に振る舞えなくなる。ある朝、みゆきとの些細なトラブルから同級生の恵子や由里の誘いによって、みゆきを無視し始め、みゆきの訴えにも心を閉ざす。しかし、恵子の友人批判を通して、「自分にとっての本当の友達（真の友情）とは何か」を考え、もう一度みゆきとやり直したいと決意する。

(2) 生徒について

1年組の生徒は、明るく元気でそれぞれ個性的である。市連合運動会や合唱コンクールなど集団としての取り組みがあった1学期を経て、「1つの目標に向かってみんなで頑張っていこう」とする姿勢や、集団としての仲間意識はやや高まってきたものの、周囲への思いやりや配慮が欠けている場面が多々見られる。例えば、男子同士のちょっかいの度が過ぎたり、言葉遣いが荒かったりし、互いにぶつかることがある。また、女子は周囲への関心が薄く、友人関係が狭い範囲にとどまっているように感じる。2年組・3年組は、授業を持っていないため、ほとんど接

したことがなく、どのような反応が返ってくるのか予想できない。しかし、4月から、縦割り応援練習・おすすめの本紹介での交流・縦割り学習会・芋煮集会の準備など、縦割りでの交流を仕組む中で、「先輩の姿から学ぼう」とするフォロワーの姿勢や、「後輩に伝えよう」とするリーダーの姿勢が育ってきている。

今回、考えの変容を見るために『あなたが考える「本当の友達」とはどんな人か。』事前アンケートを取った。結果は次の通りである。(異学年交流を仕組むために2・3年生にも同様のアンケートを実施した。)

<p><道徳的価値に通じるキーワード> 「友情の尊さ」「心から信頼できる(真の友情)」「励まし合える」「高め合える」「協力を惜しまない」</p>		
<p>「本当の友達」とは？ <1～3年生に共通して見られた考え> ◎相談できる。(多数) ○注意し合える。 ◎本音が言える。(多数) ○一緒に居て楽しい。</p>		
<p><1年生の考え> ・よく話す人 ・仲良しな人 ・優しい人 ・面倒でない ・嘘をつかない ・ケンカしても仲直りできる ・支えてくれる</p>	<p><2年生の考え> ・協力してくれる ・陰口を言わない ・助けてくれる ・正直でいられる ・互いに頑張り合える</p>	<p><3年生の考え> ・困ったときに助けてくれる ・認めてくれる ・励まし合える ・分かり合える ・自分を隠さずにいられる</p>

以上のアンケート結果より、「本当の友達」とは、「相談できる相手」と捉えている生徒が多数であることがわかった。また、1年生は一方的な考えが多く挙がったが、学年が上がるにつれて「頑張り合える・励まし合える・分かり合える」といった相互関係が見える考えが挙がった。したがって、異学年で意見交流をすることによって、それぞれの考え方にふれ、共感したり、ハッとしたり、なるほどと思える時間にしたい。

(3) 指導について

今回の授業は、3年組、2年組、1年組の異学年間で意見交流をし、主人公の心情の変化をとらえさせる。自分の考えを言うことにためらいや恥じらいが生じるかもしれないが、「さまざまな意見があっていい。例えば「わからない。」という意見だってその人の考えや感じ方である」ということを確認し、共感的に意見に耳を傾ける姿勢を日頃から確認していきたい。

小学校までは、道徳の内容として「互いに理解し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助け合う」という観点で行ってきたが、その積み重ねを生かしつつ、今回の授業を通して、「本当の友達(真の友情)」について考えることで、「ふざけ合ってた楽しい関係」や「ただ一緒にいるだけの固定した関係」を飛び越え、「励まし合ったり忠告し合ったりできる関係」「内面的な良さに目を向け、認め合い高め合える関係」を築くことの大切さに気付かせたい。また、感情の行き違いや人間関係のきしみが生じて、互いの人格を尊重する視点から克服することで、より一層深い友情が育まれることにも気づかせたい。

2・3年生は、異学年の意見交流をすることで、今ある友人関係をさらに高め合える関係にするきっかけとなったり、高校進学後の新たな環境においても「本当の友達(真の友情)」を育てていこうとする姿勢に結びつくきっかけになったりできればと考える。

6. 研究主題とのかかわり

研究主題：「学び合い」を通して自ら課題を解決できる生徒の育成
 ～異学年交流活動の良さを生かし、自己有用感を高める指導の工夫～
 研究仮説：「学習過程において、異学年交流を通じた「学び合い」の工夫を行うことによって、自ら課題を解決でき自己有用感が実感できる生徒が育成されるであろう。」

(1) 本単元で目指す生徒の姿

- ①主人公の心情の変化をとらえ、「本当の友達（真の友情）」について考える生徒。
- ②「本当の友達」を作るために大切にしたいことを考え、真の友情を育てていこうとする生徒。

(2) 「自ら課題を解決する力」を育てるための「学び合い」の工夫

- ・導入では、「友人関係について悩んだ経験があるかどうか」についてのアンケート結果を2・3年生の分も含めて提示することで、「友人関係」について考える意欲付けを行う。
- ・「本当の友達」を作るために大切にしたいことを異学年で交流することで、互いの考えを知り、友情の大切さや真の友情を育てていこうとする心情を深める。

(3) 「自ら課題を解決する力」がついたか「確かめる」ための方法

- ・授業感想を見て、友情についての考えが変容したり、深まったりしたかを見取る。
 ⇒資料や話し合ったことに関する感想にとどまらず、道徳的価値への理解や道徳的実践意欲が記述されているかどうか。

7. 本時の指導

(1) 目標

心から信頼できる友達を持つことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする態度を育てる。

(2) 本時の授業の視点

異学年の考えも知ることが、道徳的価値に迫るうえで有効であったか。

(3) 指導過程

	学習活動	教師の働きかけ (◎中心発問 ○発問 ◇指示、説明 ・予想される生徒の反応)	指導上の留意点
導入 3分	1. 事前アンケート結果を掲示し、「友情」について考えようとする気持ちを引き出す	◇アンケートの結果を見てください。 ◇今日は、みなさんと同世代の女の子の友情に関する葛藤を描いたお話です。	・事前アンケートの結果(友人関係について悩んだ経験があるか)を黒板に掲示する。 ・ねらいとする価値や資料への方向付けを図る。
展開 32分	2. 資料「いつも一緒に」を読み、考えを深める ・真理子主体で、登場人物や資料の内容を整理する。	◇資料を読みます。 ◇登場人物についてまとめます。 ○真理子は、「無視しよう」と誘われたとき、どのように思いましたか。 ・そこまでしなくても ・面白そう ○真理子は、どんな気持ちから恵子の誘いを断りましたか。	・資料読解を促すため、登場人物のイラストを使って関係をわかりやすく提示する。 ・真理子を主体に考えさせる。 ・中心発問に時間をかけられるように、指名して確認していく。

	<p>3. 真理子の心情 迫り、「本当の友 達」について考 える。</p> <p>・ワークシートに 中心発問につい ての考えを記入 する。</p> <p>・3年生中心に意 見を発表し、そ れに続いて1、 2年生も考えを 発表する。</p>	<p>●恵子の考えにはついて行けない。 ●恵子とは親友になれない。 ●みゆきを裏切れないやっぱりみゆきに謝ろう。</p> <p>○真理子は何に気づき、どんな気持ちでもう一度、 体育館に向かったのだろうか。 ●みゆきが自分にとって「本当の友達」であると 気付いた。 ●悪口を言う恵子ではなく、みゆきとやり直した い。 ●みゆきに謝ってやり直したい。</p> <p>◎「本当の友達」を作っていくために大切なこと はどんなことですか。 ◇ワークシート考えを書きましょう。 ◇どんな考えを書いたのか、各学年で交流しまし ょう。 ◇自分の意見や、意見交流していいなと思った意 見を発表しましょう。 ●相手のことを考えて、気持ちを伝える。(共通) ●何でも言い合う(共通) ●助け合う、協力する(2, 3年生) ●相手を理解する、尊重する(3年生) ●悪いところは注意する。(2年生) ●悪口は言わない。(1年生)</p>	<p>・ワークシートを配布し、 中心発問への考えを記入 する。 ・真理子を取るべき行動を 考えさせる。 ・各学年、自由に交流させ る。 ・考えの違いが見やすいよ うに学年ごとに分けて板 書する。</p>
<p>ま と め 15 分</p>	<p>4. 授業を振り返 り、感じ方や考 え方をまとめる</p> <p>5. 感じ方や考え 方を出し合い、 深め合う</p> <p>・各学年からそれ ぞれ指名して感想 を発表する。</p>	<p>◇今日の授業で考えたこと、感じたことをまとめ てみましょう。</p> <p>◇書いたことを発表して下さい。 ●改めて、友達の大切さがわかった。 ●信頼し、高め合える友人をこれから先、作って いきたい。</p>	<p>・ワークシートに感想を書 くことで自分の内面を振 り返って考えさせる。さら に文章化することでより 深い内省、確かな振り 返りをねらう。 ・1、2年生は各学年の意 見をふまえた上で自分の 考えが記入できている か、3年生は、各学年の 考えを聞くことで、これ からのことについて考え を深められているかみ る。</p> <p>・机間指導の中で、よい気 付きを書いている生徒を 確認し、指名する。</p>

<評価>

心から信頼できる友達を持つことの大切さを理解し、友情を育てていこうとする態度を育むことができたかを、ワークシートの記載内容や学習の様子などからみる。

道徳プリント 月 日() 年 組 氏名()

『いつも一緒に(教科書p150～)』

☆「本当の友達」をつくっていくために大切なこととは、どんなことか。考えを書きましょう。

☆今日の授業で、資料を読んだり友達の意見を聞いたりして、感じたことや考えたことを書きましょう。

「おはよう。ねえ今日の英作文の宿題やった？」

真理子の登校を待ち構えていたかのように、みゆきがかけよって来た。

「またなの。」

今週に入って三度目だ。真理子はちよつといやな顔をみせた。すると、みゆきは両手をあわせて、

「だってレギュラーになって練習きびしくなっちゃったでしょう。もう夜は眠くって。」

またこれだ。最近のみゆきはなにかって言う、「レギュラーになっちゃって。」と、ちよつと困ったように言う。私だって練習のあと眠いのを我慢してやってきてるのに。

真理子とみゆきは小学校の時から同じクラスだった。家も近くだったし、いつも一緒にいて双子みたいなことからかわれたりもする。中学でも、みゆきの提案で一緒にバレー部に入部した。

秋の新人戦のレギュラーが発表になったのは、二週間前だった。みゆきは、一年生の中ではただひとりレギュラーに選ばれたのである。

「自信ないなあ。どうしよう。」とレギュラーに決まった日の帰り道、みゆきは何度も繰り返した。

「大丈夫だよ。夏の合宿以来、スパイクもきまってきたし。応援するからね。」

いつになく心細そうなみゆきを真理子は強く励ました。

「やっぱり真理子は頼りになるわ。私、がんばる。」

みゆきはいつもの元気な声にもどっていた。ところがその日以来、真理子の方は、なんとなく体育館へ行く足が重くなっている。コートのおきで他の一年生とパス練習をしながら、

みゆきが先輩に混じってコートで練習しているのを横目で見ていると、なにかイライラしてくるのだ。

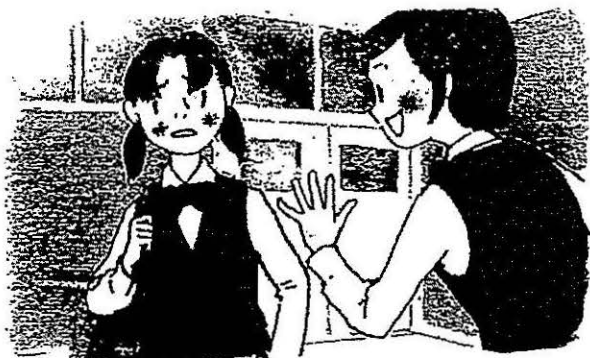
みゆきのスパイクがきまった。「その調子、がんばれ。」と声があった。真理子は黙っていた。

「ねえ、はやく。時間なくなっちゃうじゃない。」

みゆきは宿題を見せてくれるのが当然という顔だ。真理子は思わずかっとなった。

「なによ。私はあなたの宿題係じゃないんだよ。自分でやってよ。」

真理子の激しい声に、クラスのみんなが注目した。いつもなら「しょうがないわねえ。」などと笑ってノートを貸してくれる真理子の思わぬ態度が、みゆきは理解できないという表情だ。すると、それまで近くで友だちと話していた恵子がきつい調子でみゆきに迫った。



「朝倉さん。宿題くらい自分でやるべきよ。」
なにか言い返そうとしたみゆきを無視して、恵子はさっと真理子を自分たちのグループの方へ引き寄せると、真理子にそっと耳打ちした。

「真理ちゃん。あなたにいいように利用されちゃってるのよ。」

それから、今度はわざと、みゆきに聞こえるように声をあげる。

「あのひとレギュラーになったもんだから、いい気になっていばってんのよ。はつきりわからせてやった方が本人のためなのよ。」

なんとなく気まずい空気が残り、そのまま真理子もみゆきもお互いに口をきかなかった。

お昼休みになると恵子とその仲間の四、五人の女子が、真理子に話しかけてきた。

「朝倉さんて、ほんとわがままだし生意気じゃない。いつも真理ちゃんに頼っちゃって。」

と恵子が言うと、恵子にいつもくつついている由里もかわいい声で言う。

「そうそう。恵子の言うとおりよ。真理ちゃん、かわいいそうよね。」

「ねえ、みんなで朝倉さんのこと無視することにした。」

まるで日曜日の計画でも話すように、さらりと楽しそうに恵子が言うと、

「わあ、おもしろそう。やろう。」

と由里たちからも声があがった。真理子は、何もそこまで、と思いつつも、みんなが自分に味方してみゆきを批判するのは、なんとなく悪い気はしない。

20

「真理ちゃんは、私たちと一緒にいればいいじゃない。ねえ 由里。」
「そうそう。それがいいよ。そうしよう、ね、真理ちゃん。」
と由里が真理子の腕に手を回した。そうだ、なんともみゆきだけが友だちってわけじゃないんだ。

「そうね。みゆきとは喋らないことにする。」

はつきり言い切ったとき、真理子は、なにか面白いゲームが始まるような気もしていた。

その日の放課後、みゆきは、すこし照れくさそうに真理子に話しかけてきた。

「真理子ったら、さつきはあんなに怒るからびっくりしちゃった。さ、部活行こうよ。」

だが真理子はわざと顔を横にそむけて知らん顔をした。

「真理子、まだ怒ってんの。ごめん、明日はちゃんと自分でやってくるよ。」

なんでもなかったように済まそうとするなんて。調子のいいみゆき。本当に悪いなんて思っていないんだ。いつも都合よく利用して、いいとこだけ取っちゃうんだから。とにかくもう絶対しゃべらない。真理子は、みゆきが何をいっても、知らん顔をしつつづけた。

「なによ。いつまでもへんよ。真理子ったら。」

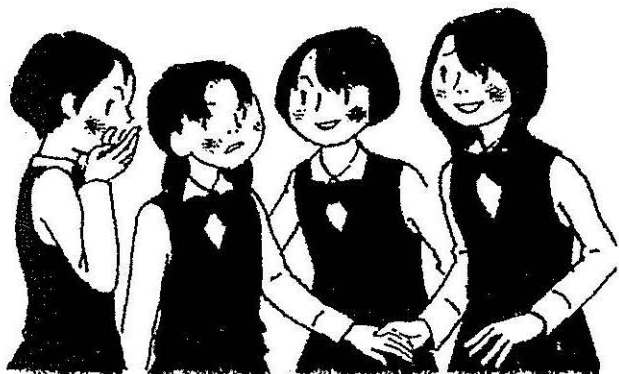
みゆきも真理子の態度に腹をたてたのだから、そのまま一人で部活へ行ってしまった。

次の日から、真理子は恵子たちと一緒に、みゆきとは絶対しゃべらないという約束を実行した。みゆきが近づくとわざと背をむける。話しかけられても知らんぷりだ。恵子や由里はもともとみゆきと仲が良い方ではなかったが、今はみゆきに露骨にいやな顔をしてみせる。そんなようすを見て、他の女子たちもなんとなくみゆきを避けるようになっていく。

みゆきは一日中ずっと、ひとり机に向かって黙ったまま過ごすことが多くなった。放課後

15

5



*露骨
かくさずありの
ままだに表すこと。

はさつと体育館へ行ってしまう。そういうとき、決まってみゆきはちらつと真理子の方を見るが、真理子は気がつかないふりを続けた。休み時間に恵子や由里たちとたわいもないお喋りをして笑いながら、あと、机につつぶしたようにしているみゆきの後ろ姿が真理子の目に映った。みゆきのまわりには誰もいない。何かが真理子の心に訴えている。だが、それ以上自分の気持ちを追求するのはやめた。

そんな日が一週間ほど続いたある日の放課後、みゆきは真理子の腕をとって呼びとめた。

「真理子。どうして無視し続けるのよ。」

10

「恵子や由里たちになんて言われたって、悲しくたってあんな人たちに負けてなんかいられない。でもなんで真理子にこんな態度をとられなきゃなんないの。いつだって何でも話してきたじゃない。」

何でも言いたいことを言ってきたのはあんなだけよ。私はいろいろ我慢してたのよと口になさうとして、その言葉を真理子のみこんだ。みゆきの目が今までになく真剣だったからだ。

15

我慢か。たしかに前はそんなこと思ってもいなかった。「助けて、真理子。」「しょうがないなあ、みゆきは。」そう言いながら、お調子者でちよつと抜けたところもあるみゆきをなにかとカバーしてやるのが楽しいとも思っていたのだから。

「恵子たちだってみんなあんたが『わがままで我慢ばかりしている。』って言ってるよ。」

20

「他の人なんて関係ない。ほんとは真理子が怒ったとき、あとで私だって悪かったって思った。いつも真理子に頼って、甘えてたかもしれないって。だから、あやまりなかったのに、話もしてくれない。真理子の言葉だから、私だって一生懸命考える。真理子ももっと心を打ち明けて言ってくれたら、私だってそれに応える。でも、今みたいなやり方、ずるい。卑怯だよ。」

5

ずっとこらえていた思いをおつけるように、みゆきの声は上ずっている。なにか言わなければ、と思うものの、真理子は頭の中が混乱して、なんと行っていいのか自分でもわからない。とうとう、

「口に出して言わなきゃわかんない人には言っても無駄よ。」

と言い残すと逃げるように駆け出した。もうみゆきとは友だちじゃない。心に何度も繰り返しながら。

10

部活に忙しかった放課後は、今は恵子たちのグループと教室の隅でおしゃべりをして過ごしている。恵子は話題も豊富で、思ったことをずばつと口にする。みゆきだけでなく、他の女子の悪口を言ったりもするが、それはたいがいみんなが感じていたことだったりするので、真理子にも痛快だった。そんなある日、恵子がふと、

「ここだけの話んだけどさあ、わたし由里ってほんととはきらい。だって男子の前だと態度がごろつとかわっちゃうんだもの。」

といった。由里は塾で先に帰ってしまったている。真理子は「えっ。」とおもわず聞き返した。「だって、由里ちゃんとは親友でしょ。いつも一緒にいるじゃない。」

20



「最初、座席が隣どうしだったからね。こつちの言うことに逆らわないから楽しだね。でもこれからは、真理ちゃんも親友になろうかな。この前も由里ってさ……。」

得意になって話す恵子の声は真理子の耳に入ってこなかった。なぜか、机に向かつてうつぶせていたみゆきを思い出した。あの時、みゆきは泣いていたのかも知れない。

真理子は、一緒に帰ろうという恵子の誘いを断って体育館をのぞいてみた。みゆきが先輩に混じって練習をしていた。みゆきのレシーブミス。先生のきびしい言葉が飛んだ。「みゆき、ドンマイ。」先輩の声に「はい。」と答えて、みゆきはもう一度ボールを追う。真理子はつらくなって、体育館に背をむけて、校門にむかつて歩きだした。足どりは重かった。あの日以来、教室でみゆきの笑顔を見ていない。

いつも一緒にすごしたたくさんの時間。お互いに一番近くにいたはずだった。「ずるいよ。」と言ったみゆきの声が真理子の心に響いた。

もう一度やりなおしたい。本当の友だちとして。真理子はいますぐにでも体育館にいるみゆきのところへ走りだしたかった。だが、みゆきの心を傷つけた事実が消えないのだ。許してくれなかったら、と思うと恐かった。それに、恵子。そうだ、約束を破ってみゆきに話しかけたら、今度は真理子のことを責めるに違いない。

すこしのあいだ、真理子は校門の方をじっとみつめていた。それからゆっくり振り向くと、一歩一歩確かめるように歩きながら、もういちど、体育館へと向かった。

文 西野真由美

（雑誌教育情報掲載資料「雑誌の手引」）「中学校 読者物資料とその利用」主として他の人とのかわりに開くこと。「又部省（現在の文部科学省）」